

教務だより

2012年6月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

2012年の「夏の思い出」

茗溪塾塾長 宇野 雅春

いつもは静かな夜の住宅街に、けたたましい笑い声や、叫びが聞こえます。どうも近くの公園で花火をしているようです。火花が見えてきます。もって走り回ったり、アクロバティックに振り回したりしています。どう見ても年の頃、中学生です。塾帰り風の靴も見えています。「危ないよ！気をつけて！」と声を掛けると「はい」と調子の良い返事。

中学生くらいなのに、かくも下品に笑うのかと思えるような女の子のけたたましい笑い…。腹立たしくも多少不安。そこは地域的に考えて、茗溪塾とは全く関係のないところですが、もしかしたら私の塾でもそんなことがあるかもしれないと思ってしまいました。

つい最近春だったのに、もう夏。梅雨が来て、空が雲に覆われるまでは、暑い日が続くそうです。夜も、昨年は余震が続いていてどちらかというと静かで暗かったのに、今年は子供達の夜が荒れそうな予感です。パトロールを強化しなければ…と、思ってしまいます。

昔もずいぶん学校は荒れたけれど、あのとき中学生だった生徒達が今は、中年にさしかかっています。実は、自分たちも、若いときは決して模範生ではなかったのに、それはすっかり忘れていきます。大人の感覚だけで「ねばならない」論を展開しても、説得力はないものです。一度あるお母さんと面談をしていたときに「何であんなに反抗的なのかしら」としきりにぼやくので、「お母さんは、中学生の頃は どうでしたか？」と聞いたところ「えっ」という顔になり、暫く考えたあげく「そういえば、反抗的でした。」ということで大笑い、その後生徒とそのお母さんのトラブルは、ずいぶん緩和しました。相互理解が大切なのだと思います。

6月の声を聞くと、夏はもうすぐです。夏休みというと、子供達は真っ先に「遊び」を考えます。学校に行かなくて良い自由も心地よく、忙しい毎日から考えると、やっと一息つけるという気持ちになるようです。そんなとき、「塾の夏期講習がある！」というのはショックなようです。クーラーのなかった時代なら、暑い夏は活動を停止し、それこそ避暑地へ行って、夏をやり過ごしたことでしょう。交通の便も悪い中、一日がかりで山に登り、たどり着いた山小屋で一ヶ月近く過ごすなんて事も多くあったように思います。「遙かな尾瀬…遠い空」です。そんな時代と比べると、全く様相が異なります。尾瀬へは日帰りできますし、海外だって、昔より格段に行きやすくなっています。

つまり受験生でなくても、全く勉強をしないで、この期間を無為に過ごすということは時代の発展とともになくなってきたということ。何もかも進化した中で、いろいろなことを複合的にやりきる力が要求されてきているのです。部活が毎日あるから、部活だけ…とか、講習会がかなりあるので、何もできない…という論法は全く意味をなさない時代だということ。忙しさにかまけて家庭を顧みないと父親失格といわれる時代、いくつもの課題を全てこなすことが要求される時代です。

夏のテーマとして「優先順位」「時間管理のマトリックス」を『教務だより夏期特別号』で特集しています。忙しすぎてあれができない、これができないと子供達が騒ぎそうな時期です。忙しいはずの子供が深夜に花火で遊んでいるような事態は避けたいもの。計画を立て、時間をつくり出していく心構えが必要かもしれません。「勉強ばかりで、夏休みがおもしろくなかった。」といった中3生がいましたが、大人の階段を上っていくときは、年ごとにいわゆる「おもしろさ」は消えていくものです。自分が未来に向かって前進しているという感覚が、「おもしろさ」や「喜び」に変わっていく時期がいずれ来ます。まずは、自分の未来に向けた準備に時間を割き、優先順位を決めて計画を立てることです。勉強の合間に訪れた尾瀬の美しい風景がその時は、本当に美しい夏の思い出として残るのだと思います。一番大切なことを優先しつつ、その学年にとってベストな「夏の思い出」を作りたいものです。